

## 何を食べて生きる？

丸山 勉

### [聖書] マタイによる福音書 4章 1～11節

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」

次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。

更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

### [序] 「子ども祝福式」の礼拝

今日は「こども祝福式礼拝」としてご一緒に礼拝を守っています。子どもの成長と健康を願わない親はないでしょう。私自身も、やはり幼い頃、七五三で親に手を引かれて近所の神社に連れていかれたことをぼんやりと覚えています。かなり昔は幼い子どもの死亡率も決して低くなく、それで、この日まで守られたこと、またこれからも成長出来るようにとの思いが、その祝い事には込められているのだと思います。

けれども、教会での「こども祝福式」というのは、それとは似ているようでいて、やはり異なります。もちろん子どもさんお一人ひとりのために祈ることは致しますけれども、それは単に祈願なのではなく、命の源である神様、また私たちが愛し、そのために死んでよみがえって下さった主イエス様の祝福を、その子どもと家族が、また、「神の家族」なる教会が受けるという、真に祝福に満ちた式なのです。

### [1] 子供たちをわたしのところに来させなさい

イエス様は、先ほどのマルコ福音書 10章の中こうおっしゃいました。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」(10:14)。子供たちをイエス様のおられるところの連れて行くなどは邪魔になると考えた大人がいたのです。弟子たちです。しかしこれは、そこにいた者たちにとっては悪気はなかったでしょう。言わば「常識の声」です。TPO を考えなけ

ればいけませんということでしょうか。しかし、イエス様の口から出た言葉は驚くべき言葉でした。「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。(10:15~16)

弟子たちは「ええっ?!」と思ったのではないのでしょうか。ユダヤ人たちからすれば一生懸命に旧約聖書の律法を学び、暗誦し、生きようとする者こそが神の国に相応しいと考えていました。しかしここでは「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることは出来ない」と、彼らからすればどう理解したら良いのか分からない言葉をイエス様は語られたのですから。ここで「神の国」という言葉が出てきましたけれど、これは「天国」というより、「神様のご支配される交わりの場、共同体」と言ったら良いのでしょうか。そこに入るためには、「子供のように」なることが必要だとイエス様はおっしゃっているのですね。

## [2] もし神の子なら

実は、主イエス様ご自身が「子供のように神の国を受け入れて」生きた、そして生きようとした人だったのです。それをマタイによる福音書 4 章の初めの部分から少し見てみたいと思います。1 節から 4 節をお読みします。

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」

イエス様の公の生涯は、この直前のバプテスマのヨハネによる洗礼から始まります。この「荒野の誘惑」の誘惑の出来事は、その直後のことなのです。悪魔は、イエス様が神の子としての歩みを阻止しようとするのです。それは、イエス様をどこに引きずり込もうとしているのでしょうか?——それは、一つは、ずっとパンを食べて行かれる豊かな生活です。「飢え」はこりごり、食べてゆきたい、と誰もが思う。

実は「成長」ということを願う時、必ずと言ってよいほど親が子供に願うことは、「成長して食べていけるようになること」です。確かに大切なことだと思います。しかし、イエス様は**極限の空腹**の中で、悪魔の言うように「石をパンに変える」ことを致しませんでした。このように語られました。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」

悪魔は、「生きるためにまず必要なのはパンでしょう? あなたが神の子なら石をパンに変えるなど難しくないでしょう?」と言うのです。「あなたが神の子なら」、これは巧みな言葉です。「神の子らしい」イメージに答えてあげればあなたは人気が出る

よ、と言わんばかりです。それに対してイエス様の「神の子」の理解は、一生食べてゆけるという表面的な豊かさを得るのが神の子なのではない。そうではない。“食べるもの”が違うのですね。旧約聖書・申命記 8:3 の言葉を引用してキツパリ言います。

『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』。—神のことば、御言葉。それが、正にあなたの命を支え、また、命を造る糧となるのだ、わたしの生涯は、“神の言葉を食物として生きる”という「神の子」の生涯がどういう生き方なのか、それを示すものなのだ、と言っていると言えらると思います。

それは、この世の価値観ではない、全く違う価値で生きることです。逆転した価値観と言って良いでしょう。マタイ 4 章の、5 節以下も読んでみますとこうあります。

次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。

サタン=悪魔は、誘うのです。自らはまるでいつも天使が味方してくれるような、自分は傷つかない楽な生き方へと。いわゆる「奇跡」ばかりを追い求めるような信仰は足が地に着かない、神様を利用してしまふような生き方なりかねません。それもサタンの巧みな誘惑です。更に人間が弱いのは「権力力」です。平たい言い方をすれば“この世の成功者”と讃えられることです。サタンは山の上で、イエス様に目に見えるもの全てをお前にやる、と誘惑しました。これもどこかで親が子供に願うことと重なり合っていないでしょうか。「立派な偉い人になれ」と言う時に、その「偉い人」とは、名が知られた者、力ある者、お金ある者と捉えられることがあるのではないのでしょうか？——しかし、それに対してイエス様は「ノー」とおっしゃったのです。「神の子」というのはそうではない、と。もしわたしがそのような生き方を選ぶならば、それは悪魔に頭を下げること。そうであれば、この世界は結局弱肉強食の世界、正直者が馬鹿を見る世界、経済力(金)がモノを言うだけの世界になってしまいます。

「もし神の子なら」。サタンのこの言葉、これは「もしあなたが大人なら」という意味にも繋がると私は思ったのです。「大人になる」ということは社会の中で賢く泳いでいく知恵を身に付けることと言えらるのかもしれませんが、もしそれが「神様の言葉を聴かなくなること、捨てること」と同義語であるなら、「大人になる」ということは危険です。イエス様は「子供のように神の国を受け入れる人でなければそこに入る

ことは出来ない」とハッキリおっしゃったのです。これは、私たち「大人」に対する、また、自分は立派な信仰者だと思って生きている私たちへのチャレンジではないでしょうか。神の国の中心には、いわゆる「大人」ではなく、「子供」がいるのです

### [3] 子供は、主の憐れみを映し出す

「子供」という存在は、神様からの贈り物です。それは全く弱い存在として生まれ、誰か支え手がいなければすぐに死んでしまいます。子供は誰かに(普通は母親や父親に)抱かれながら成長して行きます。それで子供は「基本的信頼」というものを身に付けると言われます。しかし、それだけではありません。実は、子供の存在が大人を生かし、支えているのです。このようなエピソードを私は感動を持って読んだのですが、実話です。

ネルソンさんという、19才で海兵隊員としてベトナム戦争を体験して、アメリカに帰ってきた人です。彼はそれこそ大人の兵士として、国から見て立派に働いたので、勲章を4つも貰ったのです。ところが彼は病気になってしまいました。PTSDという精神の障害です。そして彼はホームレスになったのです。その彼の所に、かつての同級生が通りかかり、自分が勤務しているスラム街の小学校で戦争体験について話して欲しいと頼みます。乗り気ではなかったネルソンでしたが、引き受けることにしました。その教室でのことです。ネルソンは残酷な話は出来ず、戦争が恐ろしく、悲しく、お金がかかることを、統計学者や評論家のように、ぼんやりとした、きれいごとばかりを子ども達に話しました。すると、小学校4年生の女の子が質問したのです。

「ミスター・ネルソン、あなたは人を殺したのですか？」—この質問にネルソンは戦場で自分が犯した殺人を思い出します。彼はすぐに答えることはできません。頭の中で色々な事を考えました。「この教室を去るべきだ」「いや、お前に本当の戦争のことを誰も教えてくれなかったからこそ、今の壊れかけたお前がいるのだ。だから子供達には真実を知る権利がある」「YESと言ったなら、子ども達にとって私はもはやミスター・ネルソンではなく、残虐な殺人者であり、子ども達は私を恐がるに違いない」…それでも絞り出すようにして、やっとの思いで、ネルソンは小さな声で「YES」と答えました。彼は目を開けることができませんでした。すると質問をした女の子が、彼の腰に手を回して優しく抱きしめ、目に涙を浮かべて言ったというのです。

### 「かわいそうなミスター・ネルソン。」

女の子はそう言いました。その言葉を聴いた瞬間から彼の凍てついた心が溶け始めました。大粒の涙が溢れました。それから彼は戦争の真実、その残酷さと愚かさを語る勇気を得て、その後の人生、彼自身がそのことによって癒されていったのです。

(講談社刊「ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？」より)

一人のスラム街の子供の心が彼を救ったのです。彼を救うことができるのは、安っぽい人間の言葉ではない、**深い共感**です。**痛み**に寄り添えるのは、**素直な心**です。子供というのは、それを持っている存在です。これは、**主イエス・キリストの、私たちに対する憐れみの心**を映し出した心ではないでしょうか。「**喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい**」(ローマ 12:15)。—これが、「**神の国の基準**」なのではないでしょうか。

#### [結]「神の子ども」として生きる

今日はこども祝福式を守れて幸いでした。

子供は、子供のままで祝福されます。子供は、神様の愛を映し出す尊い存在です。私たちも同じです。罪人は、**イエス様の十字架の愛ゆえに、赦された罪人として祝福され**、神様からこの世に、遣わされている存在です。お互い、この世界で、「強い者」としてでなく、「弱さ」をもったあるがままの私たちとして、権力者としてでなく、「**神の子ども**」として生きていきましょう。生かされてゆきましょう。

お祈りを致します。